文人旗本三橋成烈の女訓書『童女教訓松間鄙言』（上）

The Jokunsho *Dojo Kyokun Shokan Higen* written by Bunjin Hatamoto MITSUHASHI Nariteru I

簑田将樹
WAKUDA Masaki

キーワード：近世古典学、東西交流、女子教育

はじめに

三橋成烈（一七二六～九一）は、江戸時代中期の旗本で、和歌、漢詩、俳諧の詠作や教訓本、読本の述作、古典籍、古書画の書写収集と、寡作ながらも多彩な学芸活動を繰り広げた文人である。本姓は藤原、通称は源三郎（のち藤右衛門）、号は梅朧舘（館とも）主人等。享保十一年、旗本篠田隆光（一六九〇～一七五六）の次男として江戸に出生、元文五年（一七四〇）、三橋成房（一七一〇～四〇）の養子となって遺跡四百石を継承、寛延三年（一七五〇）、大番組に加入、寛政三年、六十六歳で没した。大田南畝（一七四九～一八二三）が『一話一言』に成烈関連資料を書き写していることや、木村蒹葭堂（一七三六～一八〇二）が『天明五乙巳日記簿』に成烈来訪の記録を残していることからわかるように、当時の東西を代表する文人とゆかりがあった。(注1)

成烈には、安永二年（一七七三）十月から翌三年六月までの書簡をまとめた『飛檄』（星槎ラボラトリー蔵、原簡の合綴本一冊）と、安永七年八月から翌八年七月までの書簡をまとめた『飛檄随筆』（東京国立博物館蔵、転写本一冊。異本に『飛檄帖』、早稲田大学図書館蔵、転写本三冊）という、二種の往復書簡集が伝わる。(注2) 両書は、ともに大坂在番中の成烈と江戸在住の親族朋友との間で交わされた通信の記録で、成烈の人物像や交友圏、読書歴はもちろん、当時の政治、経済、社会、風俗、芸能等を窺う上でも一級の資料である。その全貌の紹介は他日に譲るが、書簡資料より明らかとなる成烈は、和漢雅俗の典籍や同時代の作品に幅広く関心を寄せる知識人、著述家であった。

さて、『童女教訓松間鄙言』は、成烈が四十二歳の明和四年（一七六七）に世に出した、女子向けの教訓本である。成烈にとっては最初のまとまった著述で、本文は漢字かな交じりの全十七章から成り、書中、東

西の画家十一名が描いた挿絵全十六図を加える。江戸時代には経書に学んで女性道徳を説く本が数多く作られており、その有名な事例に、中江藤樹の正保四年（一六四七）刊『鑑草』、北村季吟の明暦元年（一六五五）刊『仮名列女伝』、辻原元甫の明暦二年刊『女四書』、黒沢弘忠の寛文八年（一六六八）刊『本朝列女伝』、熊沢蕃山の元禄四年（一六九一）刊『女子訓』等がある。本書は、こうした女子教育教材の編纂刊行が盛んに行われた時流のもと、生み出されたものであった。

一方、成烈は『松間鄙言』以降、安永四年（一七七五）刊『新斎夜語』、同八年刊『続新斎夜語』の読本作品二点を著している。[注3] 一連の執筆活動の初発にあたる本書は、成烈の文業の推移変遷を辿り、その創作の主意や手法の具体的な様相を探る上で、また、当代武家知識人の人物交流や書物享受の実態に光を当てる上で、重要な資料となり得る。本稿では、『松間鄙言』の全文の翻刻を行い、成烈が用いた資料の整理を試みたい。

一　書誌

『松間鄙言』には、四点の版本と一点の写本とが知られる。[注4] 版本は全て同板で、以下のような書誌的特徴を持つ。

○体裁　半紙本、四巻四冊。
○表紙　縹色、松葉七宝繋文（型押）。
○外題　原題簽「童女教訓奈間鄙言　春（夏・秋・冬）」（左肩、四周子持枠、白色料紙）。
○構成　巻一は見返、序二丁、目録二丁、本文十九丁。巻二は本文二十丁。巻三は本文二十丁。巻四は本文十九丁半、刊記半丁、跋二丁、後見返。全八十五丁。
○見返　中央に大書「童女教訓奈間鄙言」。背景に口絵（松樹）。施印「抱玉軒印」（大坂の書肆田原屋平兵衛、版元）。
○序　末尾に「橘井館主人題／（刻印「岡谷」）（刻印「無孔鋟錘」）／亀泉養呆叟書／（刻印「亀泉」）（刻印「養獣」）」（序者および筆者は伝未詳）。
○目録題　「童女教訓松間悲言条目／東都　梅朧館主人述」。
○内題　「童女教訓松間鄙言巻之乙」「童女教訓樒間悲言巻之二」「童女教訓奈間鄙言巻之三」「童女教訓奈間鄙言巻之四」。
○尾題　「松間悲言巻之一終」「松間鄙言巻之二終」「松間悲言巻之三終」「松間鄙言巻之四終大尾」。
○柱記　「松間巻之一　○序一（二）」「松間巻之一　○目一（二）」「松間巻之一　○一（～十九終）」「松間巻之二　○一（～二十終）」「松間巻之三　○一（～廿終）」「松間巻之四　○一（～二十大尾）」「松間巻之四　○跋一（二）」。
○跋　末尾に「明和亥年（四年）きさらぎ／龍雷神人貫道書／（刻印「延陵」）」（刻印「貫道」）」（大神（太神とも）貫道、摂津国東成郡天王寺村上宮の神主・神仙家）。[注5]
○行数　四周子持枠。序九行。本文九行。跋八行。
○板下　本文は筆蹟から成烈自筆と推定される。
○挿絵　各巻に見開四図。全十六図。署名「文麗（刻印「豫斎」）」（加藤文麗、旗本、狩野周信門）、「法橋月岡雪鼎（刻印「昌信」）」（月岡雪鼎、高田敬輔門、のち西川祐信の画風を慕う）、「法眼周山画之（刻印「操興斎印」）」（吉村周山、牲川充信門）、

「豊種筆（花押）」（伝未詳）（以上、第一冊）、「河東豊浦初叟／村正美写／（刻印「正美之印」）（刻印「長者何所摸」）」（伝未詳）、「慶羽画（刻印「直芳」）」（粟田口慶羽、住吉広守門、御用絵師）、「雪岑画（刻印「岑」）」（福王雪岑、観世流脇師福王盛有の子、英一蝶門、のち土佐派の画風を慕う）、「慶羽画（刻印「直芳」）」（以上、第二冊）、「玉瀾（刻印「玉瀾」）（刻印「松風」）」（池玉瀾、京祇園下河原通の茶屋松屋の女亭主百合の娘、柳沢淇園門、池大雅の妻）、「法眼周山画之（刻印「操興斎印」）」、「蘭香画（花押）」（吉田蘭香、狩野玉栄門、のち狩野典信門）、「柳時画」（伝未詳）（以上、第三冊）、「文麗画」、「雪岑画（刻印「岑」）」、「玉瀾（刻印「玉瀾」）（刻印「松風」）」、「蘭香画（花押）」（以上、第四冊）。

○刊記

「明和四年丁亥六月吉旦／京都書林　堀川通高辻上ル町伏見屋藤右衛門／江戸書林　日本橋南壱丁目須原屋茂兵衛／同　牛込赤城明神前松本屋彦七／大坂書林　順慶町壱丁目田原屋平兵衛板」。同前に近刻予告「続編／松間喜言　嗣出」。

○後見返

明和四年六月付の田原屋の蔵板目録「故事教訓読本目録／古事談　全六冊／本朝捜神記　全七冊／続古事談　全六冊／本朝故事雑俎　全七冊／旧説拾遺　全五冊／砂金双紙　全四冊／十訓抄　全十二冊／松間鄙言　全四冊／和論語　全十冊／和漢部類名数　全五冊／神国女訓抄　全一冊／続砂石集　全七冊／明和四年丁亥六月吉日／浪華書林　順慶町壱丁目筋田原屋平兵衛蔵板」。

主版元は、『開板御願書扣』第十六冊[注6]に「覚／一、童女教訓松間鄙言　全部四冊／作者江戸　三橋源三郎／（中略）／明和四年亥五月／（中略）／開板人／順慶町壱丁目／田原や平兵衛／（下略）」、『割印帳覆本』第三冊[注7]に「同（明和）四亥九月　梅朧舘主人／奈間鄙言　全四冊／墨付九十丁／田原屋平兵衛／須原屋茂兵衛」とあること、伝本（香川大学図書館神原文庫蔵本等）の見返に版元による施印「抱玉軒印」、後見返に蔵板目録の掲載があることから、大坂の書肆田原屋平兵衛と見られる。

二　本文

※底本には香川大学図書館神原文庫蔵本を用いた。

※校訂にあたっては以下の措置を施した。

(1) 漢字は原則として通行の字体で表した。

(2) 原文の漢字は適宜仮名に開いた。

(3) 仮名遣いは原文通りに示した。

(4) 送り仮名は適宜改めた。

(5) 繰り返し記号は漢字の繰り返し「々」を除いて使わなかった。

(6) 濁点、句読点は適宜補った。原文にあるものを削った場合もある。

(7) 出典注記のある先行作品の引用や会話、心中思惟にあたる部分は「　」で、書名は『　』で括った。

序

夫女子善懐、亦各有行、其有行也、好悪之不同、如其面焉、況便其教不至、而所聞者欺詐也、所見者汙漫也、浸潤之身日任於恣肆、而不自知也者、俗習靡使然也、今也前書雖非類、然法語之言、然巽与之言、誰能無説乎、且其告辞年彷彿、我邦之古文者、而遠鄙倍、則使読者能説而繹之、所聞者貞正也、所見者静好也、浸潤之久身日進於善道、而不自知也者、亦靡使然也、乃是梅朧君之所以萬一於斯者矣、余嘗竊聞、梅朧君撫一女、而有之、則其情所当起者、誠可憐哉、若有推而広之、則不啻為児女輩焉、使彼君子刑于寡妻、庇於伉儷者、亦靡使然也、然則内外和順、靡而已矣、靡而已矣、余是以喜之、不辞為序、

橘井館主人題

亀泉養呆叟書

（序

夫れ女子善く懐ふも、亦た各々行有り。其の行有るや、好悪の同じからざること、其の面の如し。況んや便ち其の教への至らざれば、聞く所の者は欺詐なり、見る所の者は汙漫なり。浸潤の身、日々恣肆に任せて、而も自ら知らざる者は、俗習、靡然らしむるなり。今や前書、非類なりと雖も、法語の言を然りとし、巽与の言を然りとすれば、誰か能く説ぶこと無からんや。且つ其の告辞、年々彷彿にして、我が邦の古文なる者、鄙倍を遠ざければ、則ち読む者をして能く説びて之れを繹ねしむれば、聞く所の者は貞正なり、見る所の者は静好なり。浸潤の久しき身、日々善道に進みて、而も自ら知らざる者、亦た靡然らしむるなり。乃ち是れ梅朧君の斯に萬一なる所以の者なり。余嘗て竊かに聞く、「梅朧君、一女を撫でて之れ有り」と。則ち其の情の当に起くるべき所の者は、誠に憐れむべし。若し推して之れを広むること有れば、則ち啻に児女輩の為にするのみならざるなり。彼の君子をして寡妻に刑あらしむれば、伉儷に庇ふ者、亦た靡然らしむるなり。然らば則ち内外和順するは、靡のみ、靡のみ。余是を以つて之れを喜び、序を為すを辞さず。

橘井館主人、題す。

（墨刻方印「岡谷」）（墨刻白文方印「無孔鋟錘」）

亀泉養呆叟、書す。

（墨刻方印「亀泉」）（墨刻白文方印「養獣」））

童女教訓松間悲言条目

東都　梅朧舘主人述

巻之一

一　恋ひと無常は隣同士
二　女の掟は片手打ちの御捌き
三　果かなき身は艶敷き誉れ
四　やさしきは身を脩むるの道
五　苦労のたえぬが女の役

巻之二

六　七府寂しきお斎の閨
七　面白くなきは貞女の習ひ
八　九牛が一毛の家あるじ
九　君が為に命は捨てうち
十　夫を思ふは天下晴れての恋ひ

巻之三

十一　払底なものは歌よむ恋ひ
十二　珍らしくなくとも女は女風
十三　つらき勤めは大善知識
十四　形見に残る百年の艶名
十五　先から先へ心づからの勤め

巻之四

十六　聟の心に染まる白装束
十七　生々の御袋達へ諫言
その二

その三

条目終

童女教訓松間鄙言巻之乙

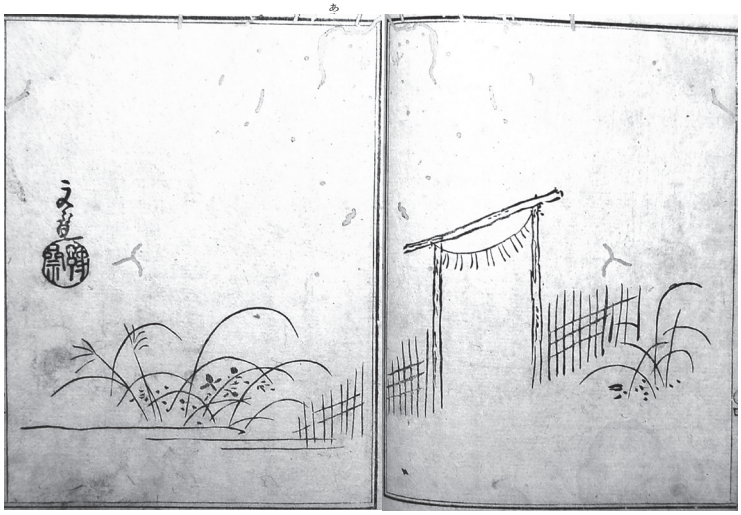
一　恋ひと無常は隣同士

和歌集の部立てにも、連歌の去り嫌ひにも、「神祇、釈教、恋ひ、無常」と一口にいわるれど、神風や伊勢の宮どころには、僧法師の参詣をゆるし侍らず。かの斎宮のいにしえ、「経」「仏」といふ詞さへ忌みて、「染め紙」「なかご」などと呼ぶなれば、天地懸隔の違ひながら、両部習合して光りを和らげたまへば、唯是、水波のへだてにて、「隣同士」といわんも無理ならず。扨、色ごのみの花やかなるに、あだし野の露の消へやすきあぢきなさ、亦大きなる相違にはあれど、盛者必衰、会者定離のことはりにもれねば、昨日にけふはうつり行きて、思ひの外の近道も有るべし。さてこそ、「煩脳即菩提」なんどいひて、恋ひのまめやかなるより悟りの道に入りたる人も少なからず。さはいへ、色にふけり、情けに溺れて、名を流し、操をけがして、永き世の物おもひとなりしたぐひも、亦あまた有れば、まよふと、さとるの心より、一歩千里の違ひとも成るべし。水火の、世界をやしなひ、世界に災ひするごとく、人参の、人を活かし、人を殺すも、まさしく、人参の咎にあらずして、用ゆる人のあやまちなり。玉は卞和が手に光りをあらはし、馬は伯楽が足に駿を得る。妹背の道、男女の間は、

人倫の大綱、子孫萬代の目出たき道にして、「あなうれしむまじ。おとこ、をとめにあへる」と宣ひしよりのならはしなれば、おのづから男は女をこひ、女は男をおもひ初むることとは成りぬるなり。誠に、あやしくも、習はぬものの、いつとなく心ぞ恋ひをしらせ初むるも、心は道にして、道は心なればなるべし。仏にも、こころ成海の汐干潟、身はいづくにも興津白浪、立ちかへりて見れば、此の道も同じことならん。仏を思ひ初め、こひそめてより、綱手縄一筋にこがれ求めて、一つうてなに至らんこと疑ひ有るべからず。仇し心の数々より、観音も尊く、勢至も有りがたく成りて、いつかわ己心の弥陀に相見せん。神も仏もおもふ人も、只一すじの誠より恋ひなば、何かは大幣のよるせなからんや。「いろいろにかさねては着じ人しれずおもひそめにし夜半の狭衣」と詠じ、浄土にも「剛の者」とや思ふらん。西にむかひて、うしろ見せねど、読めるをおもへば、むかしは何ごとも仇ならず思ひたる、と見えたり。かかるまめやかなる心ならましかば、恋ひも仏果も、末の松山浪こゆる気づかひはあるまじ。

二　女の掟は片手打ちの御捌き

天の浮き橋のうへにて、女神、男神のいかなる御相談極まりしや。男には、「天子に後宮の佳麗三千人」なんどいひ、「諸侯に七人の女あり」とも四角な文字に書きとどめ、賤の夫までも子傳り、飯炊きを孕ませても瑾にもならず、「女房の死ぬは半吉なり」とて、また敷き銀をよび、「此方の嘸も最早よい死に時分」なんどいわるるに、女方には、それには引きかへて、貞女、両夫にまみゆることなき大法ありて、聊かも外心あるをば天下の罪人とせる。是程片手打ちなる大道はあるまじ。去れども、倭漢古今の掟にして、かうなくては天下の理まらぬ訳もある、と見えたれば、かうしたことと、あきらめてねるより外はあるまじ。夫のみならず、男は、初子のけふに「小松引かん」と野辺に出でてより、華に月に、はせ歩行きて、上一人よりはじめ奉り、身分相応にのん気もなり、仕官にいとまなき身なんどは、「左やうのなぐさみもあらじ」と思へば、それぞれに才の廉目も見え、きざみきざみに経昇り、駟馬の車に乗り、青雲の志しを高ふすることなれば、花月の遊びより百倍の楽しみもあるなり。女は、上が上より下が下まで、たのしみといふ数なきを、いかにせん。白銀の花鈿、鼈甲の櫛笄に首をかざり、綾羅錦繡に裾袖を輝かすも、一人の我を悦ぶものの為ならん。若し、それならで、外の人目を悦ばしむるとならば、是、不貞不義の淫婦にして、唾吐きして、そしる



べし。我を悦ぶ夫のために容づくりし、君がために衣裳にたきものすれども、君、蘭麝を聞いて馨香とせず、仇なる外の契りのみ、あやにくに忘れがたく思ひ、さしむかふつきづきしさの、目につかぬ本性なるをいかにせん。星もあふ夜を、独り閨のうちに留守をし、「あだなり」と名にたつ桜も、七日が七日ながら、先からさきへあそびありき、明日は雪とふり敷く庭も、誰に問ひてか払はせん。たまたま家に帰り、同じ衾の夜話りには、「何ほどのこがねなくては丈夫が立たじ。急ぎ工面せよ」なんど云い付けられて、「これを拒まんも、日ごろの操、口おし」と、かかる折りだに、まめやかなるをしらせましかば、「頼もしき家童子と思はれん」と、家より外に求めめぐり、飛鳥川、ふちにはあらぬ帯び、小袖、せにかはり行くも哀れなり。夫も、その志しにめでて、「今迄こそ仇に遊びくらしけれ。もはやふつふつ思ひとまれり。さぞ憎く思ひし宵々もありにけん。あなかしこ、過ぎしことは打ち捨て給へかし」なんど、まめまめしく聞こゆるぞ、漸ふの慰み種なりぬべし。斯くて、二日たち、三日過ぎ、けふも、つくづく詠めくらせば、いとつれづれにて、かたがたに心まよはす日ぐらしの声しきりに、入り相のかねは、上埜か浅草のひびきもなつかしく思ひやれる折りふし、心しりの友人より、「今宵、乱舞催し侍れば、来り給へ」の一筆に出で初めてより、「けふは某甲の家の楊弓、明日は誰甲の別荘に鞠あり」なんど、いつしか誓ひの網はやぶれて、せめて閨洩る月だにも、枕に残らずして、また独り寝と成りぬるぞや。斯く成り行けば、きのふにけふは、うしろみの数も入りて、飛鳥川、流れ失せぬる帯び、小袖、つゐによる瀬は、あるともおもはれず。これを「つらし」とおもひて、夫をそしり、家の守りをおろそかにせば、大いなる罪人にして、女の道をそむく、と云ふなれば、かへすがへすも、片手打ちなる御さばきにして、苦しきものは女なるべし。

三　果かなき身は艶敷きほまれ

「奥様には、やすやすと御平産遊ばされ、殊に御男子様か」と問はれて、手持ちぶさたに、「否、女子でござる」と答ゆれば、「否、それも御門開きとて、めでたい内で御座る」と、いかふこまつた挨拶も、久しい時宜合いにて、漸う玄宗皇帝時代に、「男を生むことを悦ばずして、女をうむことを重んじた」と云ひしも、白楽天がわる口交じりの筆先ならめ。同じ人間が人間を生むに、是ほど違ふことはありそもないものの、きつうちがふものには極まれり。そふもてはやされし男子の、ややもすれば、鑼打ちて、親の首へ縄をつけるも多く、銀匣明けまするは大概常にして、邂逅手本に成る息子の、廿五の暁迄生きたるはなし。譬い、その瀬、このせを漕ぎぬけ、人並みの男となるにせよ、それ迄の親の心遣ひ、夜が更けて帰らねば、「南無三」とおもひ、叱りたらば、「いよいよ腹をたてて内へ寄り付くまじきか」、「馬にや蹴られし」、「狐にや化かされし」と、ことに母親は夜の目もねられず。是をおもへば、「御男子御出生も、能い御苦労が出来た」ともいふべきを、一概に「ことに、ことに」とめできこゆるは、「裸百貫」とやらにて、まづなにがなしに男のつよみ成るべし。彼の「御門開き」の半日度たながら、「家の嫡子」と崇められ、産衣の員も男子同様に取りならべ、いつきかしづき、乙を見ぬうちにするものとて、二歳の秋の比、髪置きまで仕廻ふて待つ間、程なく、これも「御門びらき」。今度は、もはや七夜にも小豆飯ばかりに省かるるも、口惜しき宿世なりけり。されど、年

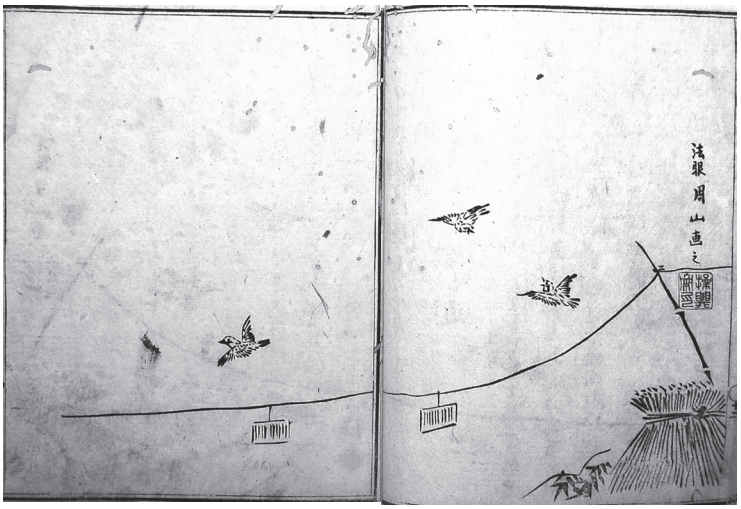
月行くにしたがひ、浪花津のすさびもつたなからず、富貴自在も器用にて、生ひ先、深き窓の内のひかりも洩れきこえ、こころをまどはす人々もありやせん。はかなく仕出ることも心ありげに、貝張り、楊枝さしに心を入れたるも憎からず、両親も、そのこころざしのなだらか成るを悦び、「いかなる宿世に、いかなる人に見せ奉らん」なんど、胸の中の有ら増しに思ひやるさへ頼もしく、あらき風は扨をき、「こまかな露にもあてじ」と、魚は鱠残魚の外を喰はせず、「三五、二八の春の花」と詠めしに、いつしか貌面痩せたるも、梨花一枝、雨を帯びたる心地の、中々にうつくしながら、「さてや、おもふことありやせまし」と、乳母に内証いひて、口占ひかせても、更に気色もしれずして、人目の関ならぬ、咳さへ出づれば、「すはや、医師」と、めしてより、四華関門を火元として、つ

いに北邙の煙りと消え失せぬ。父母は、我かのけしきにまどひ、「道しらぬとて、帰りこよかし」と、暫しは待ちしも帰らねば、「おなじ道に行かん」と嘆きしも叶はで、漸う生き残りて、世を「仇なるもの」とは悟りぬかし。近く召し馴れたる宮仕へ人は、更にもいわず。見ぬ恋ひにあこがれ、声を聞いて心をなやませし人々、かしこ爰に、人しれぬ哀れを催すも多かるらし。かかる人のうへを聞いて、努々「いまいまし」とおもひ給ふことなかれ。散るからにいとど桜はめでたけれ、夫持ちながら独り寝に明かしかね、「家の道具」と仇名されんより、いかばかりかまされ。苔生ひぬる石碑にも、「雑某の娘」「生年十七」などありて、こころざしやさしく、辞世の歌なんどあらんは、心とまるわざにして、いきてあらば、みづわぐみぬる姆にて、人もきたながるべきを、今も、花の姿を見る心地して、打ち過ぎかぬるは、不朽の艶名なるべし。

四　艶敷きは身を脩むる道

「女の、たえまじきにも能くたゆるは、色を思ふがゆへなり」と、兼好が筆の跡、尤も至極なり。三伏の暑き日、肩には一片の襦袢も置きがたく、北向きの竹椽に、花呉座のやぶれたる敷いて、裸でたをれ、西瓜を丸かぶりにして、「漸う命をつなぐ」とおもふ折りふし、金糸したたかに付ける桔梗色の帷子に、しかも、下に白き紅き襲ね着て、黒繻子の大幅は、見る目もあつきに、奈良団扇を「風のたより」と添ひ臥したる、「同じ人の身で、どふしてあのやうにしてはくらされる」と不審しけれど、是とても、瘧り、ふるひにあらざれば、暑からぬことはなけれども、容をおもひ、色を思ふが故に、たえがたきにも能く堪

ゆるなり。譬はば、祭りに出づる子供の、飴ん棒を見て喰いたがらざるがごとし。心の底の底迄も、この色を思ふ心を入み通さば、「貞女」とも呼び、「賢女」ともいふべし。「三世了達の仏も、内心夜叉の如し」と説き給へば、彼の黒繻子に袷帷子の似菩薩も、心のうちは、夜叉の大肌脱ぎなるまじきものにてもなし。人々、心より心に問ひて、筆者を憎み給ふことなかれ。さればとよ、「唐土の褒姒は狐のふるきなり」といひ、「真那古の清姫は大蛇と成りし」とはいひながら、それは、見ぬ代のことなれば、兎も角も、今、目の前の嶋田、長髪の大振り袖の、どふも狐共、蛇とも思はれざるは、色をもておもてを飾るゆへなるべし。十九やはたちの淑女は、いふにやおよぶ。三十年過ぐる迄は、誰しも貌に白粉をたやさず、衣裳に薫き物してくらす内は、思ふことも、ゑんりよがちにて、「兎いはば、人や譏らん」、「角いはば、人や提げ墨みん」と、さし扣ゆれば、心の底は自ら白粉に隠れて、身の取り置きもなだらかなり。四十年過ぐるのわる功より、「恥づかし」と思ふ心薄く成り、手まへ勝手の分別にて、三つに従ふ道は暁の夢にも思はず、「息子よりの宛て行いが不足じや」とて、大屋へ鳴り込み、隣の嫁はさもなきに、こなたの嫁のみ心に叶はぬこと出で来て、艶敷き詞はしたるく思ひ、花やかなる貌ははすはに見えて、鍼を棒に云ひなしつつ、気も折り折りは村雀、鳴る子をば己が羽風に騒がせて、「をのれ」と騒ぐも浅猿からずや。邪淫瞋恚のほのをより、息子の夫婦中のよいさへ腹が立ち、孫を憎み、嫁を鞭うつ笞の有り様、焔羅王の手下に立つ「三途川の仁か」とあやしまる。憎まれもののゑせぶとり、首に九十九の髪を戴くまで、風引いたこともなさそうなるは、めでたき数のあやかり物には、せめてかずまへ入るべきや。真那古が息女の蛇に成りしは、けなばけぬべき恋ひの炎なれば、千手の陀羅尼に成仏もしけん。このさうづ川のあるじも、若かりし程は、ゑひよゑひよと、なまめきたるらしを、「艶色を嗜むは徒心」とのみ思ひて、女の身を脩むるの道なることをしらざる心得ちがひより、かかる摜鉄の表徳は蒙りしなり。是を思へば、女は額に波を畳む迄も、十七、八の恥づかしき心を持ちなば、嫁憎むこともあるまじく、末代までも、「仏のやうな御隠居様」と令名を残さんこと疑ひあるべからず。彼の「上九、亢龍の地に至りなば、ますます初九、潜龍の心を忘るな」と戒め給ひし聖の辞も、ここらあたりのことなるべし。



五　苦労のたえぬが女の役

越前守為時が娘は、藤式部といひしが、『源氏物語』作りけるに、「紫の上の御ことを、殊にいみじく書き出したれば」とて、「紫式部」と称ばれけるとかや。誠に、かの物語りを見れば、とりどりの女郎達の御中に、紫の上は、殊にすぐれて、御さまかたちよりはじめ、御心のうちまで、うつくしく、愛で度くおはしましけること、今更拙き筆に言ふべきに非ず。おうば君に養はれ、北山におはしけるを、十歳斗りの比、光君の瘧病み呪ひに、かの山へ、ものし給ひし時、見付け奉りて、つゐに御屋形に移し奉り、「おほけなき御恋ひ人の所縁の君」と、あはれがり給ひて、此の君の御膝枕にね給ひし夜は、外へも出でず成り給ひ、いつしか新枕の打ちとけたりし御契りより、いとど浅からぬ御中なりしに、光君かしこまりにあたりて、須磨、明石の浦づたへし給ひし比は、俄に物を思ひたるも、いといとおしかりしが、三年過ぎぬる秋のころ、君、再び都に帰りおはしまし、員の外の権大納言に昇り給ひつつ、それより、日にそえ、年にまし、御威光盛んにして、御心の長閑かなるより、四季の内には、春をもて妙で度き物に思しこみましまして、中宮の秋待つむしを思ひけち奉り給ひしなんど、いへばえにめで度き御身のうへ成るべきを、朱雀院より光君へ女三宮をあづけおはしまして、移り給へば、御心は、かはらぬ御中ながら、「身に近く秋やきぬらん」と、恨みかこち給ひつつ、かたはら淋しく夜がれのみに、ものしおわしましけり。果然、男君も、この御恨みにひかれて、女宮の御方へも疎く成らせ給ひけるより、柏木の右衛門なんどが、あやしく近付き奉ることも出で来て、かたがたに御思ひなきにしもあらずぞ成り行き給ひける。是等は藤式部が一握の管城より作り出だせる物語りなれば、花は盛りに、月は真ん丸に、桧柱に、魚は鯛、飴で餅喰ふやうにもあるべきに、世のありさまを、ありありと書き出しつる妙作を、深く味はつて、身を観ずべきなり。彼の式部と申すは、石山の観世音の、仮に衆生と現じ、讃仏乗の因縁を書きあらはし給ひたるものなれば、「ありがたき御法」とも思ふべし。『源氏物語』に上なき紫の君さへ、かかる御思ひありて、憂き事は、御心の底に絶えざりしぞかし。夫より次ぎの明石の上は、一人娘を生き別れし、薄雲の女院は、道ならぬ恋ひ路に胸を焦がし給ひ、花ちる里の、たえまがちに、蓬生の君の、貧苦に責められたる。中川の宿には、箒木の、汗もしとどにたえかね、響洋には、玉葛の、つかえを起こし給ひし。兎にも角にも、「女は苦労のたえぬも

の」とさへ思へば、大きなるちがひはあるまじ。

松間悲言巻之一終

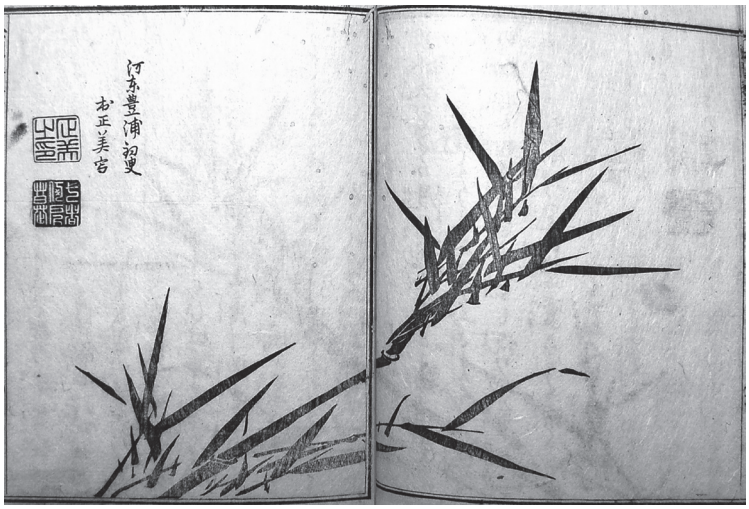
童女教訓 **榛間悲言巻之二**

六　七府寂しき御斎の閨

もろこしには「徳を以て徳に譲る」と。古への堯王は、御子の丹朱をさし置きて、民間より御取り立ての、舜に天が下をゆづりにおはしまし、舜王も、他人の禹に譲り給ひしより、末々、「徳にゆづる」を待ち兼ねて、奪ひ争ふことと成りぬる社うたてけれ。葦原や我が日の本は、さはあらで、千磐破る神代より今に至り、今より千歳に逮ぶとも、皇統連綿して、竹の薗生の末葉まで、人間の胤ならぬぞ、やんごとなき。されば、血脈の御禅りなれば、男御子の御年比成るなければ、女御子にても、御位に即せ給ふことなるとぞ。唐土にも、ままその例しあり、といへども、いまだ「帝」と称ぜず。是は、姫氏囹の、名にめでて諸越に増さりたる、女の大きなる誉れとぞ、恐れながら思ひ奉る。御徳の、男に増さり給ふにてはあるまじ。御素生の、最も賢ければなるべし。さるままに、幼帝にひとしく政を摂ぬるの大臣ましまして、餘程お手伝ひの入ることと見えたり。十善の尊位の、いともかしこさは、しるべきに非ざれば、しばらくをく。吾嬬路の道の果てなる常陸国鹿島の神の、つかはしめ給ふ、「御ものいみ」といふ女あり。是は民間に生まれながら、神のみしめの験しありて、ありふれし白羽の矢なんど立ちて、襁褓の内より、父母も、つめつめをもせで成人させ、十五の年に奉るに、神の御恵みによりて、年は積もりても、かの二七、三五の俤かはらずおはして、「今は」と下り給ふ時、俄に、みづわぐみ白雪にかはり給ふことなり、とかや。古へ、斎宮、斎院も、大かたは是に似たることにして、鹿嶋の太神も、一方の御歴々なれば、伊勢、加茂にもならひて、此の式有るにてや有りぬべし。「ものいみ」といふ名も、「斎」の字の和訓成るべし。この御斎なんど社、葎生ふる家に生ひ出でて、最も賢き仕合はせにて、かかることにあひ奉ること、この世ならぬ目出たさなり。かくはいへども、親の心の闇に生き別れを歎き、稚心に両親を離れて、行く先いか斗り心ぼそく、かなしからまし。しかのみならず、女は、あやにくに物愛でする習はしにて、ややもすれば、芝居役者のもんを付けたがり、流行染めのとやかくやと、鄙の果てまで、木綿手拭ひに、ぞんじまいらせ候の、薦僧などの風流を事とするに、御ものいみは、かけまくも神の御ものなれば、目に諸の不浄を見ても、心にもろもろの不浄を見るべきにあらず。新夜の月と花とをも、ひとり衾をいかにせん。「夢か現かねてかさめてか」と宣ひしは、伊勢の斎の宮なれば、流石に妹背の道は、神の御戒めならねば、わすられぬことなれば、十筥の菅薦、七ふ寂しく壮り過ぎ行き給ふも、いとあわれなり。「羽をならべん」と契りて、可愛がつたり、がられたりせん、新世帯の睦まじきより、これを見れば、「すうきが能くて牢へ入る人」とおもはまし。

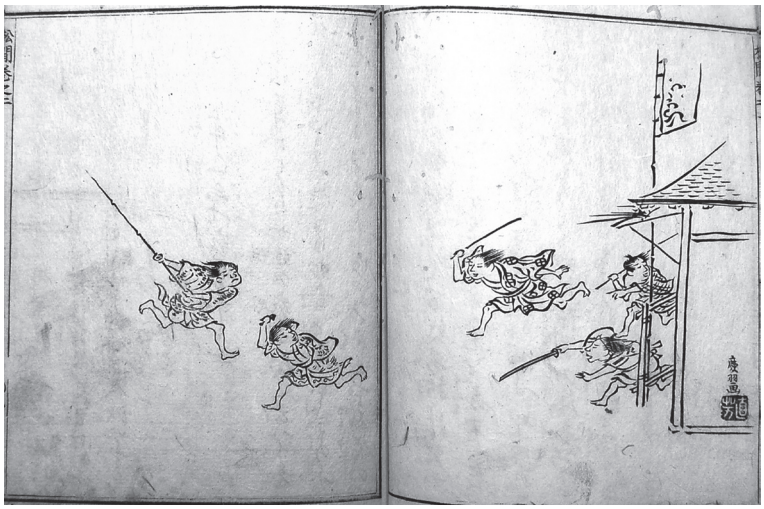
七　面白くなきは貞女の習ひ

法師ほど羨しからぬものはあらじ。「人には木の端のやうにおもはる」と、清女が筆の跡よりも、女ほどうらやましからぬものはあるべからず。仏のとかれし「五障の雲」も、聖人の仰せられし「三従の道」も、云ふにや及ぶ。天のなせる麗質の棄てがたきに、嬋娟たる両鬢も、粧鏡より外に見すべきものなく、楊柳の細腰も、軽羅情なし。奈ぞ悦ばん。舟逍遥の金扇、劇場見の薫ひ嚢は、そも誰がための粧ひぞや。見ずもあらず見もせぬ人に思ひつかれんとならば、「我が妖色を焼き鼠にする」と云ふべし。男の、華にめで、月にめでて、あこがれんには、桧笠の古くとも、茶の羽織りのきたなくとも、そのままにてもあるべきを、見ん花よりも、



見せたき花の姿自慢は、仇心の初霜にて、行く先は、うき名龍田の川の面、もみぢを閉づる薄氷より、堅き氷の刃にかかり、懼ろしきにもいたるならし。月に照りあふ遠山の眉には、かの桂男も通をうしなひ、此所に来たりて契りを求めば、爺なし子産みし譏り、まぬかれがたし。それのみならず、隙もる風の薫りに心をよせ、からねこの綱手縄、引き捨てがたきおもひのみまさりて、手入れ、足いれ、いつの程にか、関守りのねる夜を待ちぬるも多かり。風流に名高ければ、いとど心をよする人少なからずして、ぬれ衣のおそれ、いとつつまし。さあればとて、「花より団子」と、あはれしらで、壱尺五寸の大ふり袖に、かるたむすびのうしろつき。浮世又平が筆の力も、見る目くるしく、深窓のうちに開立開平を暗んじたるも、鴨の足をつぎたる心地なるべし。たまたまこれらのそしりをまぬかれ、走つて「妾」と称ぜらるる事をいとひ、納采納徴のからめいたるを和げ、昆布、鯣の結納に大門を明け、請期親迎を、ここには輿むかひの礼儀を整へて、地白、地黒の極彩色に敷き銀までして、全く三々九度は納まりけり。「聟殿は律儀な御人、律儀な御人」と誉めそやしたる、「それしかあらじ」と、誰かはそらにおもひくださん。男風俗は、能因が白川の関越へたるばかりの色合いに、寿命長久の鼻の下、柔和忍辱の目尻下りは、君聞かずや、「律儀」は何ぞの異名なる事を。されど、「君子には、つかへ易し」と心を落としつけ、これを「宋朝が美」と、めでてしたひ聞こえ、櫛笥なる玉の小ぐしも、此の人のために取りつくろひたるを、無常の敵、隙をうかがひ、男風のここちと煩ひて、今はの比に至りしに、盛りの新婦をきて、いかばかり心や引かれざらん。返す返すも小夜衣、「かさねて夫を持ち給ふな」と聞こゆるに、女は今更、其の御詞を蒙るも耻づかし。唯、

「吾が君、いつまでもおわしませ」と歎きしも叶はで、はかなく成りぬれば、女も、ともに絶へ入りしを、あたりの人、漸う水灑ぎ、薬吹き込みして甦らせ、かへらぬことを諫めて、「責めてのことに」と、自ら長き黒髪おし切りて、その棺にこめ、墨の衣に身をかへて、念仏三昧と成り給ふ。是にさへ、人のさがなき口々には、「若後家」とさへいへば、耳を欹て、かしこや爰に名を呼ぶも、仇なる世の習ひながら、この人は談議参りもきらひにて、医師たのむべき痞へさへなく、家居も仏にのみ譲りて、まめやかにおはせば、誰しる人もなき後家にて、七旬の後、目出たく往生の素懐を遂げぬ。是等ぞ、誠に貞潔の規模にして、「万代不朽の美女絶女」と云ふべし。女てふ女に、是を羨まざるは貞婦にあらず、悦ばざるは潔婦にあらず。縦ひ顔色は美絶なりとも、心は陵園の廃妾、おたふくの山の神なるべし。されば、風流を称ぜられても、「婬婦」といわれんは、女の道にあらず。また、人も心をかくまじく、罪かろげに「剛欲木訥ならんも女」といわれんに、いかばかり口惜しかるべし。能くそのほどを噛みわけて、操を守り、萬代不朽の貞女と成りすますべきところは、負けて負けてまけぬいて、些子も我がおも白きことのなき人をいふにぞありける。



八　九牛が一毛の家あるじ

「菖蒲葺く日ばかり女子の家に成る」と云いつたえ侍れども、いまだ慥かなる出書を考へず。「きのふまでよ所にながめしあやめぐさけふ我が宿のつまとこそ見れ」とよみしは、その訳とは聞こえず。されど、中々に、かかるたわぶれごとのうちにも、ふるきためしは残り侍れば、短才の勘破はいらぬものなり。一とせのうちに皐月五日ばかりあるじと成る、とは、あまりはかなき身のうへなり。「母屋のつま戸にいたれども」と諷ふ、「もや」は「母の屋」と書けり。これは、人の家といふものは、門も垣根も雪隠も、みな男亭主のものにして、女亭主の物ではなけれど、漸う奥の一間のみ請け取り前なれば、此所をさして、「はの家」と名付け、「もや」とは云ふなるよし。されば、男に対しては、九牛が一毛の家主成るべし。とはいへ、今の世には、後家持ちの茶店へは行き人多く、内儀一人のもてはやしに賑はふは、貴賤と親疎とを論ぜず、華ある家によるならはしとやいわん。是を手本にして、夫を尻に敷き、礼楽刑罰、お内義より出づる時は、三年にして分散せざるは、まれなり。君見ずや、鎌倉の尼将軍も、北条によりて政事はおさめ給ひしことを。ましてや、今時十人並みに、みめも、心も、生まれつき

たる人達の、夫の仰せを待たずして、一事を行ふことなかれ。「幼くては父に従ひ、嫁しては夫に従ひ、後家に成りては子に従へ」との御掟も、久しいものながら、浅黄帷子、黒小袖、いつもかはらぬ金言なりけり。「牝鶏晨する時は、其の家亡ぶ」とあることも、女のさし出を戒め給ふ言葉なるを、適々雌鳥が鳴いたれば迚、大きに腹を立て、かあいや、さまで咎もなき家鶏に、夜、夜中、水あぶせて責めさいなむは、何事ぞや。それのみならず、夜話しに「狐」といふことが出れば、「きつね、きつね」と、三人にして云ふがよひの、箒先に居れば舅に憎まれ、赤飯に汁をかければ嫁入りに雨がふる、ていの故実多くして、謹むかと見れば、銭金むだにすれば貧に成り、瞽言云ふのは、奴僕の腹立ちの瑞相なることをしらざるぞ、愚かなりける。

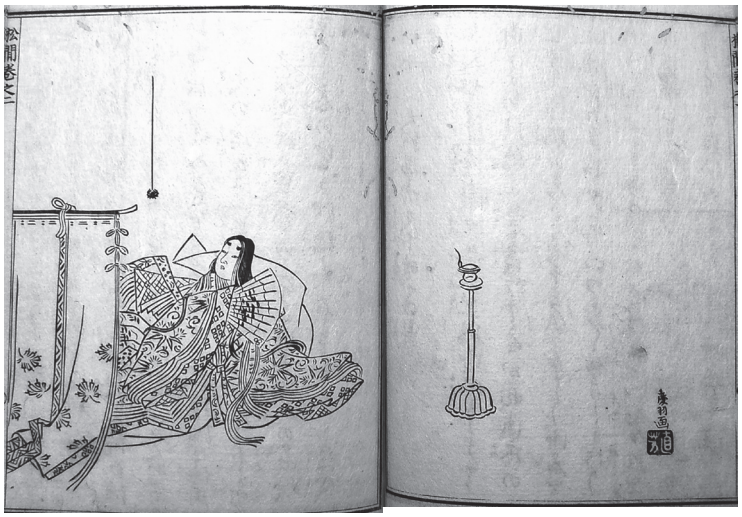
九　君がために命は捨てうち

「倉武埴笈吾妻恋台」とは、この御社の神秘とかや。その昔を温ぬるに、人皇十二代景行天皇の皇子日本武尊、勅を受けて、東夷を征し給ひし時、相模国梅沢の浦より上総国走水といふ浜に渡らんとし給ふに、暴風起こりて、御船漂蕩ひ、人々、反吐桶をいだいて、命を待つの大難なりし。往古は物ごと自由にして、軍にも寵ひ人を具し給ひし。弟橘姫といふ御方、船中にましませしが宣ふやう、「今、風起こり、浪泌し。王の御舟、没まんと欲す。是、必ず海神の心ならん。願はくは、妾が身を王の御命に購はん」と、云ひも果てず、海に入り給ひぬ。尊、ふかく歎き給へども、せんすべなし。爰に暴風は則ち止んで、御船つつがなく岸に着き、上総に到らしめ、陸奥に経歴し、甲斐、上野を巡り、武蔵国の此の丘辺にて「妻恋ひしはるかに見れば」と詠じ給ひしより、東の国を「吾嬬」といふぞかし。されば、この所を「妻恋ひの台」と云いて、その御旧跡に宮ばしら、ふとしき建てておはします。橘姫は、浪にただよひ、潮にうたれて、些かに御衣の流れ寄りたるを、下総国葛飾の里に取り揚げて、「吾嬬権現」と崇め奉る。これは是、殿御を思し召す誠の御心より、一命を、塵芥よりも、いやしめ給ひぬれば、其の御志しに海神もめでて、御船膝なかりし物ならし。一日の情けにだに百年の命を棄つる習ひなれば、二世の契りの夫婦中、今更いふに及ばねど、人の美きを談るに遠慮もなければ、腹のふくれをやすむるなり。中昔の事かとよ、細川家の室家は、明智日向守が息女なるが、滅亡の後、細川へ嫁りせしに、今、夫の留守にありて、敵がたへ囚はれては、「士君子の義に背く」と、思ひつめ給ひしにや、生害のあらましは嘗て色にも出さず、

「露をなどはかなきものと思ひけん」と云ふ古歌を団扇に書きて、侍女に得させ給ひしが、翌くる日、稚き児二人を刺し殺し、同じ刃に貫かれて失せ給ひぬ。めのと誰渠、貝々敷く屋形に火を掛け、煙りのうちに腹掻き切つて、妻子、士卒ともに、忠信無二の志をあらはしけり。果然、細川家も、いよいよ忠戦を励み給ひて、末代に英名を残し給ふも、一つには室家の貞潔の健やかなるによるものならし。「我が身も草にをかぬばかり」と、世のはかなきをおもひとり、義を千斤のおもきに守り給ふより、かかるけなげなる死は遂げ給ひしなり。「罪もむくひも未来の責めも、だんない、だんない、大事ない」と語るも、夫を思ふの切なる故なれば社、聞く人、感を催すなれ。私情をかわす人の為にせんは、端から見れば、「いかひむだ骨折り」とや云ふべき。よし、それとても、誠は同じ誠ならば、憎からじ。死に臨んでも、心ざしを変ぜず、信義の為に命を鴻毛の軽きに比して、「長く「名女」の称を残さん」と思しめすならば、夫の留守の小鍋立ては、いらぬ物なり。

十　夫を思ふは天下晴れての恋ひ

衣通姫と申し奉るは、允恭天皇の御妃にして、御かたちの殊に愛で度くわたらせ給ひ、「御衣の上まで御肌への光り通り給ひけるより」、御名をも称び奉るとかや。夕昏れのつれづれなりしおりふし、簷牙に蜘蛛てふ虫の、糸を引きけるを御覧じて、「我が背子がくべき宵なりささがにの」とよませ給ひ、「御たばこ盆の掃除せよ」、「台子へ火よ」なんど、殿御を待ちきこえ給ふは、艶しく、めでたき御心のうちまで推し量られ奉る。これは、かしこくも玉津嶋辺に跡を垂れ、倭歌三神の随一に仰がれさせ給ふ御事なれば、申すも、おそれありあけの、つきぬ筆をも留むべし。彼の松浦佐用媛は、夫の唐土の軍に舟出するをかなしび、しらぬ火の筑紫のはてに「領巾振山」の名を残し、志しの堅きを称じ、石によりても後代不朽の誉れとなれり。文禄の比、朝鮮国をせめおはしませし時、瀬川采女と云へる人は、龍造寺の麾下にて、彼の国へ行き、対陣有りしに、此の人の室家阿菊の方と申すは、小埜摂津守の女にて、貌、心も殊にやさしく、夫を思ふこと、尋常ならざりしかば、「伯が東してより、首、飛蓬のごとし」と作れるごとく、起き臥し只そなたの空のみ見やりつつ、飯も親椀ではまいらず、華も月もおもしろからぬことと思ひうんじ、旦暮筆採りて、風の便りにも、告げやらんことのみ心にかけしかば、幾千束の文もあつらへられ、飛脚屋も是がために思はぬ利分を得やしつらん。その内に、或便りに下し給ひしふみ、乗



りたる舟覆り、つみたる物も、乗りたる人も、皆ことごとく海龍王の腹へ入りたりしに、其のうち一つ二つは、浪に浮かれて、此所彼所に漂ひ着く内に、文筐一つ、肥前圀名古屋の浦に流れよりぬ。その折りふし、殿下は彼所に宿陣ましませしかば、所の者、やがて取りて、公廳に奉りしに、披かれぬれば、御なつかしさの山々有りて、末に「かくあらん行く衛もしらで頼みつる我がこころをば誰にかこたん」と書き付けて、まさしき名なんどまで有るを見て、公をはじめ、一座涙を落とさぬ人もなし。寔に「猛きもののふの心をやはらぐる道」といひ、殊に夫を思ふの浅からねば社、八大龍王も呑み残して、ここに流れ来にける水茎の、深き誠ぞありがたき。さればこそ、高麗圀へ此の事申し越され、対陣のうち、瀬川采女一人、帰国の命をうながされ、頓て鴛鴦衾上のかたり種とはなれりけり。是、まつたく懇恋切慕のこころざし、天道に通じたるにして、末代、女の軌範とすべきことなり。しかはいへども、女の佳名を残すといふことは、悲しきことのかぎりを尽くし、憂いも、つらひも、人十倍の艱難をしのびてならでは、なきことなれば、「義を守ることは番椒のからきに類せよ」とかや。「腰眼五十だけの皮切り」と思ひて、女の道を守りなば、千歳に馨しき名は残しぬべし。さはいへ、小車の引く方にのみ心をよせ、辟陽侯のために欄干にたち尽くすをば、「身をくるしむる」といふにはあらず。墻を越ゆるのいたづらより、夫婦乞食とも成りかねて、千日寺のあたりに肆されんは、身より出でたる錆にして、御手作の地獄へ行かんことは、御勝手次第なり。

松間鄙言巻之二終

童女教訓 **窠間鄙言巻之三**

十一　払底な物は歌によむ恋ひ

『八雲御抄』に「歌は、よむことの難きにあらず。心を歌になすことのかたきなり」とこそ見えはべれ。それが中にも、恋ひの歌は、一入にむつかしくて、京極黄門は、「業平朝臣の「おきもせずねもせで夜半を明かしては」とよみし歌を、其の時、その心になりて沈吟し、凡骨をはなれてよめ」と、をしえ給ひしとかや。されども、「誠の恋ひ」といわん歌は、すくなきよし。増してや、田舎辺鄙の男女の間に、歌よむ恋ひのなからんを、いかにせまし。待つ宵の侍従、ふし柴の加賀なんどは、その身にかかりしことなれば、感情も深くして、をのづから名望も高かるべし。往昔といひ、大内は、物ごと風流にして、細どの逝き迎にみやびをかわし、玉垂れの隙に見えそめて、暗部の山にやどりを需め、関こえがたき逢坂を恨みて、心を尽くし、餘れる思ひの、ことの葉に出でて、よみかわせば、実情に叶ひて、恋ひの歌の正道にも至らまし。時と所と身の卑しさと、ことごとくかわりて、今、市中なんどに、かかることを表とせんには、大屋よりの断りは、朝の中に請けべし。このありさまを思ひめぐらせば、武家一統の御代となりては、何もかも御吟味厳しく、にやけたることはならぬより、とつとむかしの恋ひといふことは、おそらくないにはきはまれり。増してや、お江戸は、人の気性尖にして、腹中大きなるならはしなれば、思ひ初め、恋ひそめてより、紫縮緬の鉢巻きに、脇息のいる病人は一人もなく、かの深閨に、人知らぬ人を思ひて、くよくよとせんより、稲葉の奥の一郭、北斗に近き所に行きて、天上より落つるの、美人と衾を同じく

せば、浩然の気を養ふならん、の手短か成る了簡より、たまたま見る恋ひ、聞く恋ひの題を得ても、己が心を恋ひにせんこと、いとかたきことなり。況んや、女房一人の口を守り、或は下女や、はしたをなぶり廻して、何を種にや歌よむべき。しかあり迚、恋ひの歌よまん手效ひ反故に、隣や又隣の娘や後家をたぶらかし、不義の名を蒙らしめんこと、磯城嶋の道にをいて、露斗りも有るまじきことならし。殊更、女は、松の操をあらはし、なよ竹の一節、二節のいたづらぶしをいとひ、父母のゆるしなくては、男とものいふべきにあらず。夫に一度まみえて、外を思はぬことなれば、「恋ひの歌は出来ぬ」といふが本のことと云ふべし。とはいへ、歌よむ人は、見ぬ境にも心到り、富士の煙りの絶へぬ昔をおもひ出で、飛鳥川の淵瀬かわり行く世を見そなはして、詞をつづくることなれば、題にむかひてよむ歌を、恋ひ人と思ひて、「このこひはたさん」と、切に求めば、誠の道に叶ひて、其の本意を思ひ出でんことは、その人の志しの深さ、浅さに寄るものならし。題にむかひて歌よむとも、生ひ先こもれる窓のうちに、仇なる恋ひの歌多くよみ捨てんこと、心あるべきことならん歟。落ち散りなんも、おそれ多し。その歌を見ては、そぞろにその人をおもひやるも、人の情の常ならずや。されば、「人ならばうき名や立たん小夜更けて我が手枕に通ふ梅が」とよめる、伊達氏の御娘人こそ、うつくしく、やさしきためし成るべけれ。

十二　珍布くなくとも女は女風

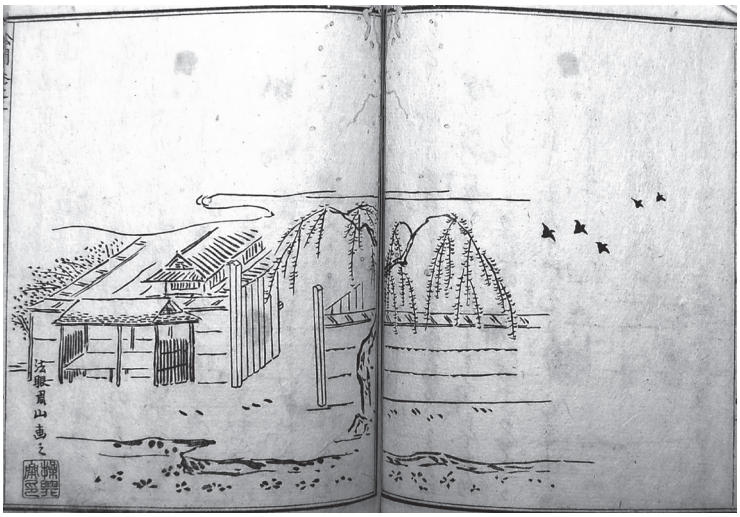
人の異なるを好めること、むかしも有りしにや。「法師は弓を射、馬を乗り、士いは仏法しりたるきそくする」など、『つれづれ艸』にも書き出して譏り侍るに、近き世は猶更にて、蕎麦切りも、醤油汁で喰ふては負けに成り、堅魚も、芥子酢は止めにして、蘿蔔おろしを尋ね、羽子板にも、どんどや左義長をやめにするより、何もかもさら成りて、町人は肩衣を着て歩行きたがり、諸士いの御うちかた様の前帯びするは、新より奇を好める心なるらし。昔は、遊女は、「木地を見せる」とて素顔を重にし、夫を持ち、或は、仕官へする女は、白粉をするをもて礼義祝儀とせしに、脂粉の却つて顔色をけがすをきらふにや、今は、「湯化粧」なん

どいふこと流行りて、白粉付けるは文盲成るやうに成り下れるは、いかなる間違ひより起こる所ぞ。それはまだしも、自ら己れが美色に高ぶり、鏡を愛するより出づる所にして、「少しの心得違ひ」とや云ふべき。傾城のまねを素人のするといふことは、高き人、卑しきを希ふこと、口おしき次第ながら、「風流華奢を渠にまねばん」とのことならし。実にや、傾城は、昨日は張郎と枕をならべ、今日は李郎と衾を同じうして、浅ましき浮き身ながら、一郭の大夫なんどいふ物は、富有の人の酒宴に陪し、高貴の客の臥席に幸いせられて、自ら向上に育てば、雪の朝に淡茶を点じ、雨の夕べに香木を闘はしめて、中々のおかみ様よりは艶しければ、仇し心の若ひ女中は、羨まんも無理ならねど、それさへ心ある人の好めるにはあらぬに、大津、伏見なんど、境地、狭き所の傾城町に入り込みしあたりは、素人の娘も、端げいせいの真似して、洒落を尽くし、責めて彼の大夫主なんどのさまをも似せよかし。眉毛も竪様につけ、額口へ櫛さしつ。心言葉も、かれを真似たる、賤しき内の陋しきならし。または、女の女風は古めかしとや。扇の画、莫若入れのかたちも、やさしきをむねとせず、小袖は、黒裏の終丈に羽織りまで着て、男女の差別のしれざるたぐひもあるぞ、不審しき。抑、『古今』の序に、小野小町が歌は、「あわれなるやうにて、つよからず。つよからぬは、女の歌なればなり」といひ、和琴は「女の、物和らかに掻きならしたるぞよき」なんど、ものがたりにも書き出して侍るに、いやしき女のこころより、心をかはす人多きをうらやみ、契短、蹴倒しなどの風儀を真似、男をやりつけ、叱りつくるより、何もかも渠に習ひ、両夫三夫にまみゆるも厭はず、爺なし子はおろか、いろいろな、ててあり子を設けて、三百目の首代は通ひ牒にとめをき、終には粟田口の烏の腹へ葬られんこと、日を計へて待ちぬべし。その身、その身の道を守りて、面白くなし共、貞操を磨かば、かかるうき身とも成りはてまじきを、異なるを好むの、わる物ずきより、引き出しぬる災ひなるべし。続て、女は、たてて好めること、もうけて、しみぬるは、よからぬことなり。「心の筋をば、ただよはしからず、もてしづめをきて、なだらかならんのみなん、いとめやすかるべかりける」と、玉かづらの巻きに記しをきしも、最尊かりけり。

十三　つらき勤めは大善知識

「しかるに、我等、たまたま受けがたき人身をうけたり、といへども、罪業ふかき身と生まれ、ことに、ためしすくなき川竹の流れの女となる、前の世の酬ひまで、思ひやる」と諷ふは、一休和尚の筆作にして、哀れなる詞にあらずや。寔に、女の懶きといふが中にも、よるべさだめぬ浮きふしの身ほど、かなしきは有るべからず。一双の玉手も千人の枕と成り、半点朱唇、万客になめかわされて、愛せらるるかとおもへば、さはあらで、心にもおもはぬことに腹をたてて、せむる客有り。しみじみすかぬをも「つとめ」と思ふて、よいほどにあしらへば、「思はぬそうじや」と、ふすぶる相手もありて、泣いておもしろき日をくらし、笑ふてかなしき夜を明かしかぬること、肥前の丸山も、越前の三国も、流れをたつる者は、かわらぬつらさ成るべし。それがなかに、平安城に「大夫」と称じ、長柄傘の下に蜀江の裲襠して、白眼佗の世上の人を見たるは、貌の栄麗やかなるより、心の底も下醜ならず、一向遊びものとはいへども、意気地を立て、義理を重くし、将、風流の情け

うすからず。掻ひひく爪音、手つき、口つき、「諸侯大夫の令愛」といふとも、何か耻づべき。一郭のものは、猶更、是が為に奔走囲繞し、偈仰の頭を傾くれば、全く盛りの勢ひにて、「見る人、是を羨まざるはなし」といへども、はちす葉のうへは難面き下にこそ、ものあらがいはつくなれば、内証の所は喰はず、貧楽の身よりは百倍のくるしさなるらし。価ひにまかせて人に従ふ稼わひの陋しき事は、いふにや及ぶ。是が身請けの日に、銀と骸を両替へにするとて、天秤に掛けたりしは、焔王廳の御捌きに似て、折らばおちぬべき萩の露、拾はば消へなんとする玉篠のうへの霰のやうなる身に、「飯一椀も多く」と、すすめられたらん社うたてけれ。此方の譜代婆々を名代に懸けたらましかば、「長へ大きな徳を付けん」とおもふも可笑し。此の属いに上なき大夫だに、池のうきねの、

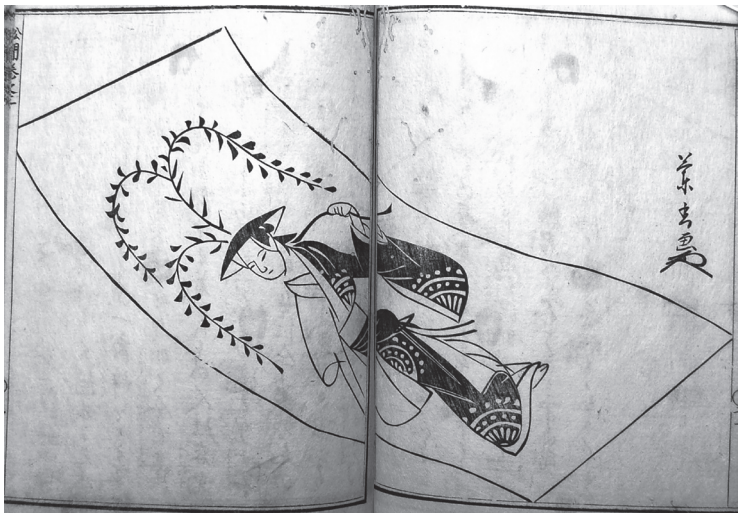


鴛鴦の水かきはせわしなきに、それよりしもの鹿恋ひ、麝女郎なんどいふものは、浮き舟のさだめぬ浪の契りを待ちて、夕昏れごとに身もこがれつつ、弾く三味のいとせめて、忘れぬ人の問ひくるにぞ、少しの命は延びやせん。されど、心にむすぼほれたる髪結ひのつけとどけ、香具屋の通ひのかずかず、小石の中におもひはありながら、うち出でんことのいとかたくて、御影供参りの小袖をだに、踊り場の浴衣をさへ、かけつはづしつ、さまざまに、かなたこなたの木綿襷、七野社のめぐみをねがひ、流れて早き年の矢の、師走は猶さら入り目多く、かたらふ人は稀にして、心一つに思ひ餘るより、塵塚山の塵とも成りたく、郭門の柳で首もくくらまし。よしや、その憂き身をも、さまでな歎きそ。性空上人の袖をぬらし、西行法師が舌頭を坐断せしも、室や江口の君なれば、うきが中に身を観じ、大解脱を得ば、つらき勉めぞ、なかなかの善知識成るべし。

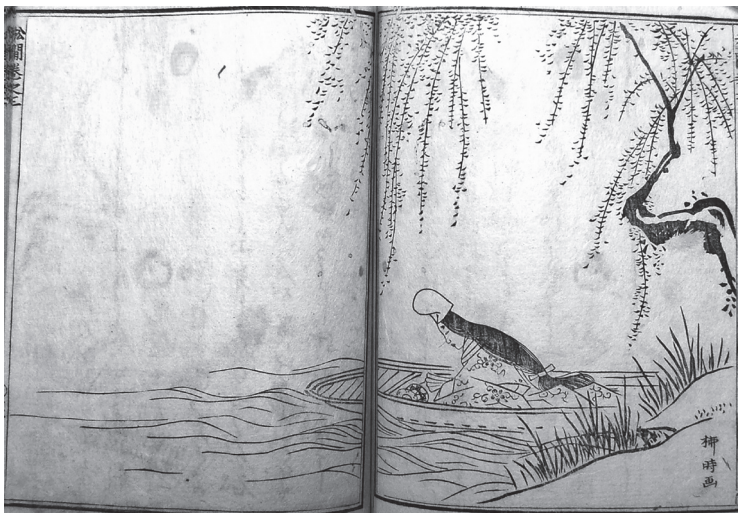
十四　記念に残る百とせの艶名

七十年ばかり上がりての世の事とかや。花洛新屋敷島原に、「高間」といへる奏の位有りて、餘所に見るものだも、その艶色をしたひ、一度辞をかわすものは、猶忘れがたきこととせり。加之、今百年に向として、艶名、郭中に著きは、その人の容貌進退のことのみにあらず。貞操の潔きこと、士君子の処女にも恥ぢず、義のために命を鵝毛の軽きに捨てたること、聞くにも哀れに悲しきことなりけり。その異理和理を尋ぬるに、精好屋九郎右衛門といふものに馴染み、年月契りかわして、「主の心の疑ひをはらさん」と、外の客は皆切れはてぬれば、今は人にも浮き名を呼ばれ、家主も、ことのふ忿りぬれども、聞き入れず、

只、主のことのみに明かし暮らし、人は只管、狂人のやうにそれれども、「一所のために」と、志しを尽くし、千曳きの石の、うごきなき思ひなりしに、男、いかがの心なるや、かれがれに成りもて行けば、「もしや、後見の頼もしからぬにや」と、井手の酴醾、枝もたわわにおくりなんどせしが、そのしるしなく、いつしか外の家の大夫に馴れ初めて、今は「理を連ぬる中なり」なんど聞こえぬれば、彼の許へ文して、しかじかの訳、つけとどけなんどせしかども、彼所には、かしこくも、「主は、そさまより先の馴染みなる」なんどおぼめかして、中々に此方を譏る筆のおもむき、いとど思ひをもやしつつ、熟々思へば、往じとし九郎右衛門が『平家物語』を講じ侍りしに、仏御前のことをよみ侍りて、「萌へ出づるもかるるもおなじ埜辺の艸」といふ歌につきて、入道相国の薄情



しき心をうとみ、「かかる心持つ男は、「大夫」と云ふべきかは。おもしろからぬことなり」なんどいひしを聞くに、いとあわれに嬉しくて、その歌を九郎が筆して短尺に書いて貫ひしを、枕に立つる屏風の端に張りて、今も目路に見え侍るに、我が身のうへに成り侍りて、かなしき事限りなし。去りながら、思ひかへせば、浅妻の浅き心よりして、誠なき人の言葉を「信」とし、今更かたらふべき人しなければ、「とひもせで行きぬる道にまよひなばそこはかとなくくゆる成るべし」と、よみし人の心さへ恥づかしくて、今は、家あるじにも、おもて合はすべき義理なく、うかれ出でんもはしたなし。九郎に逢ひたり迚も、おもしろからず、「よしや、我が身一人の宿世ぞ」と思ひ究め、先づ、九郎へ年月の心ざしより、秋風立ちしことども書きつづけ、手馴れし品に黒髪一束ね切り、包



み副へて、「責めてなからん跡は、憎ませ給はで御覧あれ」と、ととのへたり。偖、となりの大夫主へも一筆染めて、「我が身は迚も仇なることに成り候得ば、千歳変はらず九郎様とちぎりおわしまさんことを祈る」とて、名香一裹み添へて、遣はす。その外、妹の高岡へこまごま書きをき、「何々の小袖は誰々様へ、かたみに参らする」、「何の模様は、かねて御ほめおはしまし候へば、何甲さまへ」なんどまで、くわしく書き残し、長が夫婦、下の奴婢まで、つどつどかたみ分けして、袖に朽ちにし秋の霜氷の、刃につらぬかれて、死しけるよし。その筆の跡を写し写して、幾萬人の袂をかぬらしぬ。寔に、陋しき遊女とは雖も、節に臨んで死を軽くし、己れをうらみ、人を咎めざること、やさしきことの限りなるべし。今も彼の里に年旧ものは、語り伝へて、青楼の亀鑑とせるも、むべなるかな。しかし、これもむごい目に逢ひつめて、かなしきの至つてかなしき身となれば社、かかる名望は残ししものなり。なんぼ名はのこしたくても、せつないことはいやなるらし。河豚は喰ひたし、命はおしし。いつの世にかは、濡れ手で粟は掴まし。

十五　先から先へ心づからの勤め

西国、奥羽の豊凶を謀り、二百十日、八朔をあてに買い込みて待ちぬるは、大壮なる商売ひとはいへども、得失を掛け合わすれば、深し き利分も有るまじきに、裏借屋の寡婦の一人子を洗い粉、白粉に物を入れ、瀧の下の踊り講を闕かさせず、「天晴れ、何万石の母親にせん」と育つる社、おもへば、身代不相応の胆の腑なりけれ。成る程、仕合わせ次第にて、匹夫より起こつて大身となること、倭漢にその例多く、嗜にも「女は氏なくて玉の輿に乗る」といへば、それを目当ての策とは見えたり。先づは容儀も十人並みには増さりて、三味尺八も相応に仕習ひ、去る御屋敷きへさし上げたるに、しばらく御意に叶ひければ、日ましに奢りが付いて、人を芥のごとく見下し、我慢嫉妬の角ふりたて、夫が傲じて、御惣領の儲けの君を害せんとせしこと顕れ、既に死刑に至りしに、御隠居様の御詫びにて漸う宥められ、御門前より一棒の下に追ひ放されしが、天性の美色、いまだ残りければ、人も捨てがたく世話して、かしこの青楼上へ「突き出し」といふものに売られ行けば、此所に行きかふ風流士の、めづらしきものに思ひて、これが宴席に杯を擲ち、是が紅閨に枕を需めて、しばらく全盛なりしを、かの徒心より、日ましに我が儘に成り、私情をかはす人のために、七重の白妙も脱いで相送り、昨日は渠をあいし、けふはこれを憎みて、心一筋ならねば、家主もこれを怒りて、楼上をおひ卸したるより、野上の宿に草枕の亭主と成り、御油、赤阪に羈客の情けを待ち、たまたま関札の泊まりを迎へて、堅縞の木綿帯び胸高にむすび、繋駒橛の側に彳みたるは、かれが一世の勢ひなるべし。されど、中々田舎は物ごと実めなれば、反りがあひかねて、此のあたりをも逃げ出で、かしこやここの小宿を尋ね、行く衛さだめぬ海士の子の、小舟よる岸の額に、呉座を抱へてたちつくし、水馴れ棹みなれぬ人に交はりを竟むるより、雨漏る苫のうちに火鉢を抱へて粉面を照らす有り様、覿面りに見るも耻づかしけれど、これが属ひにも名聞ありて、我が妖色にほこりて、詞みじかく悪口の応諾へしたるを、手柄と思ふも浅ましや。かく成り行くものとても、同じ人の子なれども、身のはかなきを思ひ弁へざるより、万法唯識の心の筋の、みだれ初めて、迷ひはてぬること、憐れならずや。よし、その人の上のみにあらず。女は、我慢偏執の心がら、萬のあし

きことのみ出でくれば、身のいやしく、心の拙きこと共を、明け暮れおもひ悲しむに、しくは有るべからず。

松間悲言巻之三終

童女教訓**案間鄙言巻之四**

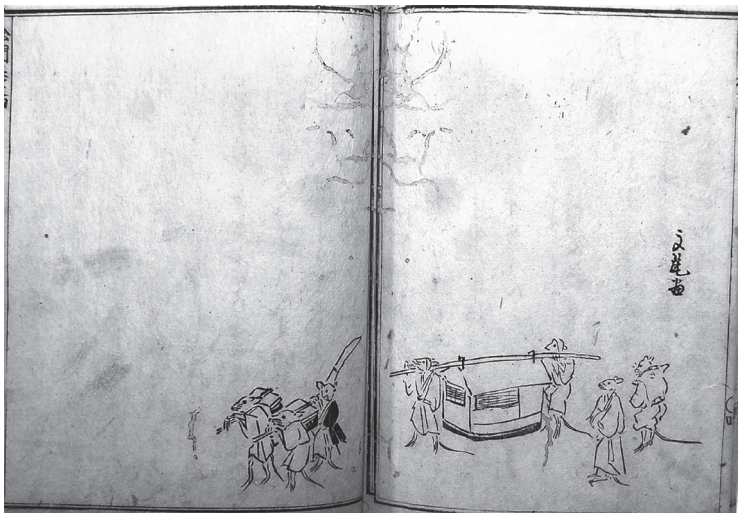
十六　婿の心に染まる白装束

「婚礼に白装束を用ゆるは、再度かへらぬ祝ひごとに葬礼の式を仮りてする」と、おうば殿の御咄しなりしを、「奈ぜ葬礼は白装束をします」と問ひかへしければ、「幽霊が白いものじやから白くする」と答へられし。「奈ぜゆうれいは白いものじや」と問ひかへしければ、「葬礼が白いからじや」と答へられ、是から先は、尽未来際を経ても、果てのつかぬ問答には成りけらし。全くさやうの小縁の事にてはありそもなし。人生まれて産屋の式は、みな白装束なり。白きは、ありのままの色にして、初生のおひさき、いかなる官位職禄にも染めつき給はんことを賀するなり。人死して葬礼の時も、死生始終のことはりに任せて、生まれたる時の、ありの儘の色にかへし、行くさき九品蓮台へ望み次第に染まるべき為にぞありける。されば、昏礼に白きを用ゆるも、女の心裏に一物なく、生まれながらの姿なることを標し、赤くとも、青くとも、夫の心次第に染み付きぬべきためなるとかや。その故に、色直しの小袖は婿のかたより出して着するも、同じ訳とぞ思はるる。凡そ、女は男の詞を待つものなれば、女のかたより推して男のかたへ行くべきにあらず。上古は、先づ婿のかたより女の家に行きて、婚礼をとととのへしことなりとぞ。されば、その夜、女の両親、聟のはきたる沓を懐にして寐るの古法ありとかや。光源氏の君の、左大臣の家へわたり給ひしも、入り聟にはあらず。唯此の式なり、と見れば、うたがひなし。斯くして後、男の家に女の移ること、陽来たつて陰を唱ふの、みちなるべし。三々九度の盃を嫁の方より肇むるも、嫁は亭主方なれば、夜酒の御試みをすることと見えたり。王家には今も、この式のこれり、とや承る。下ざまには、とり失ひて、中古には嫁入りの輿を早く出すは、「嫁方の負けなり」と云ひ出し、婿方には、片時も早く入るるを手柄とせしより、輿迎ひには一門の内、器量の人を選みて、二度三度も遣はす躰のこと、風俗と成りしとかや。是は戦囹の餘風にて、あじな所へ我を張つて、夫婦和順のはじめに争ふかたちをなせる、誠にいまいましきことならん。礼は和を貴としとせることなれば、何所までも温和ずくが能い筈なり。ましてや、婦の、夫の許へ行くを、いささかもいなまんこと、あるまじきことなり。果然、泰平百年来、この風儀は止めに成り、約諾の刻を違へざるこそ妙で度けれ。さるにても、二月八日ははなれ月、三月は桜醒め、十月は神な月、往亡、申の日、不成就日なんどの、かわるがわるにて、きはまりがたき物は、嫁娵りの日柄なるべし。縦ひ吉日良辰を選びたりとも、夫妻の心ざし深からずば、何のしるしかあるべき。富家の女は嫁し易し。嫁すれども、その夫を軽んず。貧家の女は嫁し難けれども、嫁してその姑に孝ありと作りしも、貧苦のうちに育てられて、憂ひを忍ぶの心より、女の道のめでたきをいふならめ。譬ひ富饒高貴の女たりとも、身のいやしきをおもひしみ、嫁御の心に白無垢を着て、夫の色に染まりなば、申の月、申の日も、

さるとは少しもかまはざることならん。

十七　生々の御袋へ諫言

「一切の女人をば生々の母と思へ」と説き給ふも宜なるかな。生死流転のこの身なれば、今日は「きたなし」と見る乞食の娘の腹へも、翌は生まれかはりて、はらまれやせまし。また、「こは穢らはし」と思ふ癩病婆々も、前世は、その腹にやどりしもしれず。斯う気が付いて見ればおかしく、旦那場の多き心地して、佗人と思ふものもなし。仏の、衆生を一子とおぼすも、このやうなあんばい成るらし。されば、生々の御袋達に申すべきことあり。「老いては子に従ふ」の習ひなれば、心をしづめて聞こしめせ。まづ世界には種々の段があり、白上より黒上がよく、上より



上がよく、夫から段々成り登りて、極大上上吉に至る如く成る物あり。是を「十界」といふ。その第一界は「仏」にておはします。「仏とは桜の華に月夜かな」と宝晋斎が句の如く、何もかも至極なものなり。其の次ぎは「菩薩」にてまします。是も結構な物ながら、「望は一夜のへだてにて」とよみて、未十四夜の月のごとく、少しは満ちぬところあり。その次ぎを「声聞」と申して、常に仏の御側にましまし、御法の声を聞く人にして、御声色をも真似給へども、劇場の「頼朝」の如くにして、誠のものとはいひがたし。また次ぎを「縁覚」と申して、これも大概同様にて、仏の御親類と云ふべし。是を「四聖」と申すなり。其の次ぎは「天人」なり。雲の上に匍匐つてね給ふことは、御寺の天井にて慥かにしりぬ。この御人達は、「是が欲しい」とおもへば直に出来、「何が喰いたい」とおもへば直に出来て、暑い寒いの苦しみもなく御暮らしなさるるよし。人にとりていはば、御大名の様な物なるべし。併し、御大名も、若しお手違ひが有ると大事に成りて、忽ち御家没落し、習はぬ賤の奴ともなり給ふ如く、天人も、ひよつとすると挿枝の花凋み、五衰の雲に覆はれて、大きに憂き目見給ふとぞ。上の四聖は、そんな気遣ひないおくらしなり。天人は最早油断の成りかぬるに、その次ぎにあたる「人界」は、いとど苦労は多き筈なり。されど、苦斗りにてもなく、楽もあれども、楽と思ふと其の裏形の苦に成る事、居続けの上げ句の、金に追はるるに異ならず。その次ぎは「修羅道」とて、形は人のありさまながら、あさゆふ争ひ闘ひて、憂き目絶へず。大かたは「八島」「箙」「清経」「兼平」などの諷ひにてもきき給はめ。「畜生」とは、目に見ゆる犬、猫、鼠、鳶、からす。鯛も鰹も蛞蝓も、家造ることもならず、物着ることも叶はで、角あれば牙なく、牙あるものは

角なく、羽あれば足を二つに勘略せられて、つらきこと云ふに及ばず。また、「餓鬼界」と云ふは、人の姿はありながら、物喰ふこと叶はぬ而已か、思ふこと一つとして成ることなし。「「水を飲まん」とよろぼひくれば、水は忽ち火炎となる」なんど、古き諺に云ひ伝え、目のあたりの乞丐のごとく成るべし。その次ぎは「地獄」にて、是が第一のわるき、せつなき世界にて、「懼ろしき事詳かに説かば、聴く人血を吐いて死なん」と『倶舎論』に説き給へり。有ら増しは閻魔堂の張り付けにあることなれば、爰には洩らしつ。抑、上の四聖のめで度きより、下の「三悪道」の苦しみは、年を同じふして語られざるなれども、人間、一念の迷ひにして地獄に堕ち、一念の悟りにして仏と成ることなれば、行く先、萬里の違ひも、初めは一刹那の訳合ひなり。扨、生死流転して、犬と成り、猫となり、大名となり、乞食と成る。其の業因の引く処によるゆへに、仏、大慈の道を垂れたまひ、悪業を断ち、善因によらしめ、人ことごとく仏果菩提に到らしめんの、御方便を設け給ふ。泰きかなや、前世いかなる積善の餘報にや、今、人界に生を得て、この道を聞くことよ。是を悦びとして、この生にこの生死を出離れ、無上仏果に至らずんば、いつの時をか期すべき。一念迷ふ時は、また、にやんにやん、わんわんの身とも成り、その時悔ゆるとも証文の出し後れなるべし。

その二

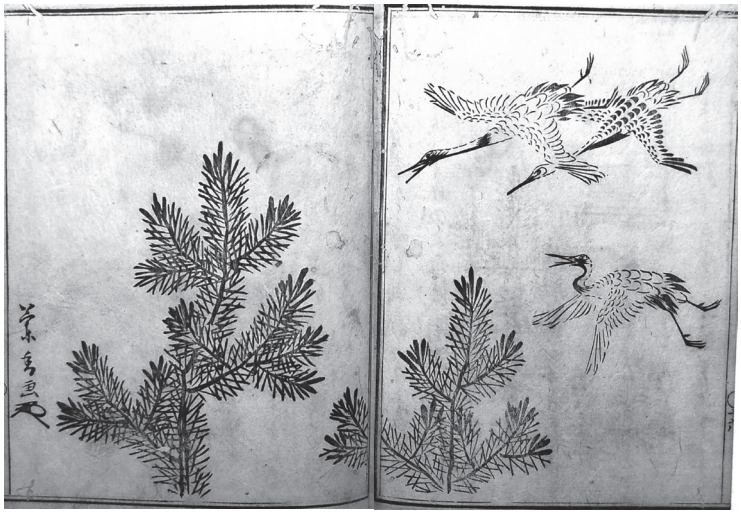
如何に生々の御袋達、はやばや仏地に至り給ふ御心はなきや。夫こそ、彼のおふくろの御得手もの。兼ねて四十八夜や千部で坊様のをしえあれば、「往生極楽、成仏得脱、得たりやあふ」と、仏のこととさへ云へば、銭を出し、米をやり、金のなる木を一本ほしや、「「鐘供養の一檀那」と仰がれん」とおぼし召すらめ。爰を小松の「重盛」風に、今一篇、御諫言申すべし。元来「仏」と申すものは、この世界を離れて、十万億土の西の方におはしまし、御寺の御本尊は、その献立て紙なれば、その献立て紙へ「御信心」迚、金銀を擲たせ給ふは、傾城買はるる息子殿より大きなる御損なり。仏は利欲妄想と云ふこと、努々おわせぬ御ことなれば、何を進ぜても、なにを振る廻ふても、「嬉しい」とも、「能くした」とも、思し召す気遣ひはなし。上げて置いた飯の、一粒も減らぬも能き証拠なるに、況んや何を上げんかを、「上げん」と申した迚、仏の賭賂を請け給ふことあらんや。公廳の官人でさへ、そのやうなことは合点し給はず、却つて大きな御咎めにあふを、どふして十方無礙の仏様の、思ひもよらぬ御ことなり。夫よりは、面々の心を仏さ

ま流にして、同気相求むれば、十万億土の遥々も、裏道から行きて、甚だ近く成るなれば、「此を去ること遠からず」と説かれし御法も嘘ならず。若しや仏にならず共、声聞、縁覚の人数へは慥かならん。夫より「用心し給へ」と云ふは、一念迷ふ時は地獄に落つること矢の如し。餓鬼、畜生もいやならずや。「いや」と云つても、断りはたたぬことなり。凡そ、生死流転して、生きかわり、死にかわり、六道を廻ることは、種のこぼれて芽を生じ、それが長じて花咲き、実り、また種こぼれて、生ずるが如し。その内にも、孔雀、鳳凰の名ある菊も、承和の色にかへりたがり、絞、更紗の瞿麦も、どこへか行きて、おかしな淡紅ばかりになる如く、よき物は求めがたくして、あしき物は卓山なれば、油断をすると跡へ戻りて、またしては馬と生まれ、牛と成り、地獄、餓鬼へ堕ちんこと、自ら警めずんばあるべからず。蒔かぬ種ははへざれば、三悪道の種を蒔かずば、三悪道の気遣ひは必ずあるまじ。仏の苗を植へたらば、定めて仏のはゆる筈なり。何をか「胤」といふ、人間念々の妄想なり。こころに順ふことは喜しく、心に違ふことは腹が立ち、よき衣、よき器、見るにつけ、聞くにつけ、欲しく成り、人のうへのみ羨敷く、それに付きては、何もかも心にかなはず愚癡おこりて、この三瀬川は、心のうちに流れかかりて、時のまも止むことなし。さればとよ、「貪慾」「瞋恚」「愚癡」を「三毒」と名付けて、三悪道の胤とはなしぬ。何事も慾深く、目には色を好み、耳には能き声をのみ聞きたく、口は猶更、鼻にもかんばしき匂ひを願ひ、身にふるるには、いとどなを心の猿の浅ましや。思ふこと一つかなへば、また二つ、三つ、四つ、いつつ、六つ、七つ。やるせなき慾心は、ただちに餓鬼の縁となり、永き苦しみを受くるなり。一瞬の間も、「おしき」「ほしき」の心起こらば、「一瞬の餓鬼道なり」とおもひ悟りおわしませ。人と争ふ心おこり、「渠よりは勝らん」、「此をば取つて落とさん」と、妬み、そねみの、その業は、即ち修羅道へ堕つるとぞ。闇き心のはかなきは、畜生の業を招く、としろしめせ。兎角、一念にこれを刈り捐てて、二念をつがせ給ふことなかれ。この三つは、心にをいて造る罪なれば、「無き名ぞ」と人にはいひてありぬべけれど、闇の夜に蒔く種も、生ゆる味は同じことにて、其の業をば引くなれば、心にとひて警め給ふより外はなし。妄語、綺語、悪口、両舌は、口にて造る罪なり。殺生、偸盗、邪婬は、身にて作る罪にして、何れも地獄の業と成ること、恐れても亦懼るべし。口も手脚も、とにかくに、こころ一つの主人なれば、心の罪の三毒を、根切り、葉切りに、伐りたやさば、邪婬、妄語の小枝まで、かれ果て

んこと疑ひなし。かくて、身口意の三業を滅しぬれば、直ちに仏と同じ胸中に成り、仏と手を連ねて行き、目を並べて見ることなり。然らば、火の燥けるにつき、水の湿へるに流るるごとく、十万億土の西におわする御阿弥陀も、膝組みで咄しが成りて、その時、ふり顧りて娑婆を見たらば、六道に迷ふ者は、さぞ気の毒に思はれんこと、大夫桟敷きから追ひ込みを見る如くならん。何と聴聞の児女達、御散銭を抛げ給へ。

その三

大夫桟敷きから見れば、追ひ込み、切り落としの苦しきも、また、その所へ居て見れば、外から見たより、中々にて、茶も莨若ものまれ、楽しみもあるから、おもへば、地獄も落ち着きたらば、どふやらかふやら工面が出来て、折り折り、活々といふ声に、涼しい風が吹きなんどするは、成るほど、面白いこともあるべけれど、そふおちつくと、一向先行きはならず、油断をすると尻へ下がるなり。地獄、餓鬼、畜生、修羅のかなしみは旦置く。人間に生老病死の四苦有りて、生まるる時のくるしみあり。それから、乳が呑みたくても物もいわれず、蚊が喰ふから啼けば、「虫がかぶる」と灸を居へられ、間違ひだらけの大難儀。漸う年も取るか、とおもへば、花の姿は春ごとに萎み、月の貌は秋毎に傾き、昨日の少年、今の白頭。蛇爺、猫また婆と成りはつること、隙行く駒の間なるに、夫が中に、物求めても得られぬくるしみ、おもふに別れ、おもはぬにそひ、憂いにつけ、悲しいにつけ、苦のたゆることなく、まして、女は、物つつましければ、心一つに思ひあまるくるしさ、男に十倍せり。さりとて、そのままあり果つべきや。頓て此の世の御暇出でて、鳥辺、舟岡の煙りと成ること、是又、第一のくるしみなり。また、生きかわり、死にかわり、此の苦をせんより、生死を離れて仏果を得たらば、痩身代を娵に渡したよりも、嬉しからまし。実に人間の身は、苦しみのあるも尤もなり。固が清浄にないものを、無理に立派にして置く故にてもあるべし。皮一重下には膿血みち、大小便利、目汁、鼻汁まで、身よりいづるもの毎に、奇麗な物は一つもなし。増してや、女は十四より天癸下りて経水になり、あやまつては崩漏、白帯の愁い、人にかたるも耻づかしく、神仏も是を忌み給ひ、穢らはしきこと、また、男に十倍せり。よし、それ迚も、さまでな歎きに、この身とても、物好きにかやうに出来たるにてもなし。地水火風の、仮にやどりて形をなせるものなれば、暖かなるは火なり。うるほへるは水なり。息は風なり。形は地なり。心は空の躰なれば、皆寄せものにて、我と云ふべ



きものしなければ、穢れ見れば穢れながら、浄むべきやうもなし。増して、女は三従の身にして、命は夫にまかせ置くなれば、我が身は我で居ながら、我と定むべき我はなし。さう仮合はせたるものなる故に、朝には紅顔有れども、夕べには白骨と成ること、すみやかなり。まして、女は年も早くふけ、譬ひ無常の敵来たらずとも、きのふにけふは俤かわり、柳の髪は秋をまたで、迅速の上の迅速と云ふべし。誰も渠も、かふ云ふわたしも、不浄にきたなき、苦しみおほき地水火風の仮合にて、無常迅速の身なるものを、浄楽我常とおもひくらすの迷ひより、千秋萬歳、万々歳の、祝ひごとのみうれしくて、暗きより暗きに入りて、長く仏名を聞かぬ身と成りはつるは、浅猿からずや。身のはかなきを思ひとり給はでは、いつか生死をはなれはつべき。かへすがへすも、無常の速やかに、地水火風のかりなる身を観じ、苦敷きことどもおもひしみて、「再び生死の海に漂泊はざるやうに」と、明けても暮れても、寝ても寤めても、をじかの角の、つかの間も忘れず、女は、まして身の浅ましきをしりて、生まれ来にける宿世を悔やみえずば、貞潔の道も立ちがたく、変成男子の願ひも叶ふまじ、と思ひもうけ待つれば、女のかなしき数々書き出して、深閨のかなしみ艸となしけるなり。もし、この巻きを開き給はん小鬟児女、心をとめて操り返し給はば、慚愧懺悔の媒とも成りて、罪障消滅の志しにうつり給ふならば、すすむる功徳、ともに成仏して、吾が後の世もやすかりぬべし。あなかしこ、髭男の、年ごろ女郎達に憎まれて、「其の鬱忿を散ぜん」と、さがなき口を色彩にはあらず。只管、児女の教訓を思ひ立ち、「千とせの末まで松の貞操の目出度くおわしまし、猶春毎に緑のいろをまし給へ」と思ふより、「松間」の二字を冠せるものならし。

松間鄙言巻之四終 大尾

続編

松間喜言　嗣出

明和四年丁亥六月吉日

京都書林　堀川通高辻上ル町　伏見屋藤右衛門
江戸書林　日本橋南壱丁目　須原屋茂兵衛
同　牛込赤城明神前　松本屋彦七
大坂書林　順慶町壱丁目　田原屋平兵衛板

春の夜の閨はあやなし。梅の花、色こそみえね。香りやは朧ろに、深き窓のもとに独り灯にむかひて、いつぞや、梅朧舘主人より、この書の末に予が一言を加へて世に弘めんと、贈り給ひし『松間鄙言』といへるふみを、くりかへし読み侍るに、恋ひと無常を、かりの宿りの隣家と見立て、萬法一如の円理を始めとして、女の掟に艶しき誉れをつづけ、身を脩むる道は能く苦労に堪へ忍び、七符寂しき、お斎の里の内、面白くなき貞女の習ひなれば、人の中にも人ぞなき九牛が一毛、君が為に命を捨てうち、只夫を思ふが天下晴れての正しき恋ひを教へ、しかはいへど、世降り、俗おとろへて、歌よむ恋ひの稀なるを歎き、珍敷くなくとも女は女風にして、「河たけの流れの身」とはいやしめど

も、つらき勤めより却つて悟りの道に入りし、むかしがたり、形見に残る百年の艶名をうらやませ、先から先へ心づからの勤めして、女の身は只、我がままの心を退け、赤き黒きも、ひとへに聟の心に染めなすべき白装束のわりくどき、さては子に従ふべき御袋達への戒め、その二、その三と、残るところなく、みやづかへのこと繁き、その中にも、人をまつ間の折り折りに、鄙しからぬ言の葉を、かき集め給へる志し、ひとへに狂言綺語、讃仏乗の因みなるべし。そもそも我が神路の奥を尋ぬるには露違へる岐も侍れども、是も教へのふもとの一道なれば、「同じ雲井の月を詠る人もがな」と、もとめに応じて筆を加へ侍る。

明和亥年きさらぎ、龍雷神人貫道、書す。

注

1　南畝による成烈関連資料の書写については、箕田・浜田泰彦「『新斎夜語』解題と翻刻」（二〇〇四～二〇〇六年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書『「奇談」書を手がかりとする近世中期仮名読物史の構築』、平成十九年、大阪大学大学院文学研究科）に、蒹葭堂邸への訪問については、徳田武「『新斎夜語』と談義本」（『日本近世小説と中国小説』、昭和六十二年、青裳堂書店）に報告がある。また、成烈の略歴については、箕田「（新斎夜語）解説」（江戸怪談文芸名作選第二巻『前期読本怪談集』、平成二十九年、国書刊行会）に記述がある。

2　成烈書簡集の現存については、市古夏生「梅朧館主人と飛檄連中―『飛檄』『飛檄随筆』を通して―」（『近世文学研究の新展開―俳諧と小説―』、平成十六年、ぺりかん社）に報告がある。

3　『新斎夜語』『続新斎夜語』については、『前期読本怪談集』に翻刻がある。

4　版本が香川大学図書館神原文庫蔵本（神原甚造旧蔵）・国立国会図書館蔵甲本（大惣旧蔵）・同乙本（宮田脩旧蔵）・内藤記念くすり博物館蔵本（第一冊欠）、写本が国立公文書館内閣文庫蔵『賜蘆拾葉』第十二集所収本（新見正路筆）。以上は原本を確認。ほか、「日本古典籍総合目録データベース」には大橋図書館（現在の三康文化研究所附属三康図書館）蔵本の登録があるが、大橋本は関東大震災により失われている。

5　「大神」の読みは、一説に「おおが」。享保十六年（一七三一）生か、安永年間（一七七二～八一）没。日向延岡の人。延享年間（一七

四四～四八）に十五歳で上京、宮家に出仕するが、宝暦（一七五一～六四）初年に夢中で仙道を感得、致仕。遅くとも明和二年（一七六五）には上宮の神主となる。姓山口。通称日向守。字貞卿。号龍雷神人・蓬莱真人・棲霞観主人。舎号雷亭。門人からは延陵先生と呼ばれる。著述に宝暦十年刊『南遊集』、明和四年刊『神国女訓抄』、同四年刊『中臣祓旧伝』等。ほか数種の道教経典の和刻に携わる。大神貫道の閲歴については、中野三敏「文坡仙癖」（『江戸狂者伝』、平成十九年、中央公論新社）および同校注『成仙玉一口玄談』（新日本古典文学大系八十一『田舎荘子・当世下手談義・当世穴さがし』、平成二年、岩波書店）に記述がある。また、以上の先行記述を引き継ぐかたちで、坂出祥伸「摂津上宮の神官・大神貫道が著した道教養生書『養神延命録』について―道教内丹説にもとづく神道的養生法―」（『江戸期の道教崇拝者たち―谷口一雲・大江文坡・大神貫道・中山城山・平田篤胤―』、平成二十七年、汲古書院）に事蹟の整理がある。なお、『神国女訓抄』（国会本による）の巻末には、以下のように、大坂の書肆田原屋平兵衛による貫道関連書の広告が載る。「日向霊社大神貫道著述／一、中臣祓旧伝 既成 二巻／一、南遊集 既成 二巻 詩集也／一、三教全鼎論全／一、三教帰神抄 二巻／一、天書紀纂註 三巻／一、神国女訓抄 一巻 既成／一、神武紀解 既成 二巻／一、古語拾遺註 五巻 既成／一、神学破邪論／一、浪華憑談 前編 近刻／一、神国女訓抄後編 嗣出／一、後鳥羽院勅撰和論語 十巻 一百八神之託及聖帝親王公卿武将貴女釈子之金言悉以記録之／一、同評註 嗣出」。

6 『大坂本屋仲間記録』第十七巻（平成四年、大阪府立中之島図書館）による。

7 『割印帳 東博本 影印版』第二巻（平成十九年、ゆまに書房）による。

〔附記〕『松間鄙言』序文の訓読についてご教示を賜りました住谷孝之氏、資料の翻刻および図版の掲載をご許可いただきました香川大学図書館、資料の閲覧等でお世話になりました香川大学図書館、国立公文書館、国立国会図書館、三康文化研究所附属三康図書館、内藤記念くすり博物館の方々に感謝申し上げます。本稿は、JSPS 科研費 18K12298 および愛知淑徳大学研究助成費 18TT01 の成果の一部です。